

教育実習と事前事後指導の現状と課題

～3週間実習後の振り返りから～

小 山 祥 子

はじめに

本学の保育学科では、保育者になる資格免許として、保育士と幼稚園教諭2種免許状が取得できるようカリキュラムが編成されている。2年間の中で、この二つの資格免許取得のために必要な授業と実習の構成は、これまでも必要に応じて改編されてきた。本学では、建学以来キリスト教の理念に基づく教育を行っており、保育者養成についてもキリスト教保育を担う人材を育成している。そのため、実習先としては本学附属幼稚園、及び北陸圏内のプロテスタント系キリスト教主義幼稚園に依頼している。

本稿では、まず幼稚園教諭免許に焦点を絞り、これまで行われてきた教育実習と事前事後指導の内容を一度整理した上で、現保育学科2年生を対象に3週間の教育実習後に行った調査結果から、教育実習の現状を明らかにし、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

I. 本学における教育実習の概要

1. 教育実習総論

(1) 教育実習の目的と意義

実習は、実際に幼稚園現場で一教諭として子どもと関わる貴重な機会である。学生は、子ども一人ひとりと関わる中で、子どもの成長発達に直に接し、様々な体験を通して幼児の教育について実践的に学んでくる。限られた時間と条件の中で、大学で学んだ理論や知識をもとに、子どもの実際の姿を知り、保育者として子どもの発達にどう関わっていくのか、援助の実際を学ぶことを実習の大きな目的としている。

教育実習には、主に次の3つの視点から意義がある。第一は、学生の保育の専門性を高めることである。実習を通して保育の専門性を身につけるのであるが、その際に土台となるものは、授業で学んだ保育の理論や知識、技術である。学生は、これらの学びを実践の場で統合させ、応用させながら、保育者としての専門性を高めていく。これまで受動的に受けてきた講義内容を、学生自ら能動的に発揮させる機会として、持っている知識を試行錯誤させていく。実習を通して、自分は何を知っていて、何を知らないのか、また何に困り、何に感動したのかなど、子どもから得た共感や疑問、保育者から受けた指導を課題としながら、保育の専門性を高めていくことができる。実習は、学生が主体的かつ意欲的に展開していく体験として、重要な意義をもっている。

第二に、学生の人間としての育ちや自己の発見を得るということである。学生のほとんどは保育

小 山 祥 子

者になりたいという明確な目的をもって本学に入学してきている。社会に踏み出す第一歩として保育の道を選択し、その準備を学びの中で進めている。しかし、様々な学習を通して、「子どもが好き」だけでは保育者のスペシャリストになれないことを感じる時期もある。それは、学習していくうちに、人間に関わる仕事として、保育の広さ、深さ、複雑さを思い知らされ、夢の実現には現実の厳しさを伴うことを知るからだといえる。これは、誰しも一度は通過する保育への不安と責任の重さである。しかし、それらを覚悟した上で、あらためて保育の魅力を見出し、「自分もあの先生のようにになりたい」と目覚めさせてくれるのも実習である。単なる夢から脱皮して、より確かな夢へと変えていく機会として実習がある。子どもと日々関わる中で体感する喜怒哀楽、そして心揺さぶられる感動体験は、保育者になる前に一人の人間として大きな成長をもたらす。つまり、人間として自分のあり方を考える機会として実習には意義がある。

第三に、学生がもたらす保育現場への影響である。現場の保育者や子どもたちにとって、学生の存在は新鮮な風であり、何らかの影響を与えている。学生は、幼稚園の子どもたちに真新しい刺激を与える一方で、時に保育現場を混乱させることもある。実習園は、そのようなリスクや、指導に要する時間や労力を覚悟しながらも、学生を受け入れてくださっている。それは、近い将来、一人でも多くの良き保育者が現場へ羽ばたいてほしいという願いと、少なからずとも学生の存在から、日々の保育の盲点や子どもの違った一面を見出すことがあるからである。学生を通して、新しい知識や技術を知ることでもできれば、学生の素朴な視点から何かを発見することもある。つまり、現場の保育者も学生を指導することを通して、自らの保育を省察することができるのである。その意義を考えると、実習生の立場は重要である。

(2) 1年次教育実習(1週間)の目標

1年次は、主に次の3つの目標をもって実習に臨んでいる。

①子どもを理解する

保育の対象は子どもである。様々な角度から机上で学んだ「子ども」を、実際の現場にいる子どもと関わりながら、学生の五感と心を最大限に使って体感的に子どもを知ることが、実習の第一の目標である。実習で、子どもの様々な言動を目の前にし、一緒の場にいることで、子どもの内面を読み取り、心や体の成長発達について具体的に子どもを知ることができる。子どもと直接触れ合うことは、子ども理解への第一歩であり、さらに生活を共にして子どもの関心事項を知るとは、子ども理解への手がかりとなる。子どもは、一人ひとりが全く異なる存在である。個人の差がどういう場面で、どのように現れているのかを注意深く観察し、実際に対応していく中で保育の中心にいる「子ども」を学ぶ。

②教師の仕事や役割を理解する

子ども一人ひとりが異なるために、教師の仕事や役割は、より広範かつ複雑となる。子どもを迎える登園前の準備に始まり、保育中の個と全体に対する教師の援助と働きかけ、保育後の清掃や打ち合わせ、日々の記録や教材研究など、子どもが居る時も居ない時も、教師の仕事に終わりは無い。実習の中で、教師の仕事や役割を助手的に体験することは、保育の営みを理解

することにもつながる。

③幼稚園の営みを理解する

幼稚園の役割や機能について、理論的に身につけた知識を現場の保育の中で具体的に学ぶことも重要な目標である。園が担っている子どもに対する教育的役割、保護者や地域に対する子育て支援の役割を、日々の保育の中で学び取りながら、幼稚園教育の意義を理解していく。

これら3つの目標に向かって学生が個々に努力し、2年次の3週間実習につなげられるよう自身の課題を見出しておくことも大切な目標となる。

(3) 2年次教育実習（3週間）の目標

2年次では、1年次の実習で学んだことを土台にして次の5つの目標に基づいて実習する。

①キリスト教保育を理解する*

キリスト教保育は、子どもは神によってつくられた存在であり、一人ひとりに異なる賜物が与えられた存在であると理解している。子どもの発達に留意しながらも、個々の個性、発達の個人差など概念だけでは捉えられない「一人の子どもの今」を大事にして関わっている。また、子どもも一人の人間として、様々な問題状況を経験しながら生きているが、それらを年齢にかかわらず人間共通の状況と理解する。そして、そのような状況の克服は、信頼しうるものに出会うことによってのみ可能であるところから、子どもにもイエス・キリストにおいて示される神の愛と恵みを伝えている。『キリスト教保育指針』にも述べているように、キリスト教保育は単に、子どもを社会に適応させるためだけに働くのではなく、子どもと共に見、聞き、考えることを通して現在の社会・世界への問いかけを持つ働きもしている。このようなキリスト教保育を経験することは大切な目標である。

②教師の仕事や役割を理解する*

保育者としての教師の仕事は、想像以上に複雑である。朝、子どもを迎える前の細かい準備、日々の教材研究、保育後の清掃や打ち合わせなど、園児の居ない時間帯の仕事を含むものである。子どもとの直接的なかかわりだけではなく、保育者同士の連絡や相談、そして家庭や地域との連携のあり方について学ぶ。

③子どもを理解する*

実習は、大学で学んだことを応用して自ら指導計画を立てて実践してみる絶好の機会である。しかし、そのことだけに集中して、「子どもを理解する」という肝心な目標を見失ってはならない。実習生は、自分の目と耳と心を最大限に開いて、子どもの様々な言動から、その子どもの内面的な心の動きを探り、子ども理解に心がけることが大切である。子どもの心身の成長発達について、年齢差・男女差・個人差などの違いを具体的な状況や場面において、体験的に理解していくことが重要な目標となる。

*引用資料：北陸学院短期大学保育学科「教育実習の手引き」

小 山 祥 子

④幼稚園の環境と役割を理解する*

幼稚園は、地域の様子、広さ、園児数、園の建物や設備などが実に様々であり、そこで行われる保育も多様である。まず園の環境をよく知ることで、その役割がわかってくる。幼稚園教育が「環境を通して行われる教育」といわれているように、幼稚園における保育にとって、環境は非常に重要である。園全体がどのような保育環境の中で構成されているのか、子どもが環境とどのようにかかわりあっているのかについて理解を深め、そこから幼稚園教育の役割を理解する。

⑤教師としての成長を目指す*

大学で学んできた保育理論や技術を実際に行っていく機会が実習である。一人ひとりの子どもを理解し、適切で有効な保育を行っていくことは、ベテランの保育者でも難しい。実習生が、現実の子どもたちに対して自分の思い描くとおりに保育ができないのも当然である。こうした実習の失敗や挫折を体験して、評価・反省を繰り返すうちに自己の課題が明確になり、幼稚園教諭として成長していく。

2. 教育実習の実施基準

(1) 幼稚園教諭2種免許状取得のための一般的基準

幼稚園教諭は、学校教育法第81条で、「幼児の保育をつかさどる教員」として規定され、教員免許法に基づいて幼稚園教諭免許状を取得するものである。幼稚園教諭免許取得に必要な教育課程は、一般・基礎教育科目と教職・専門教育科目から構成されるが、「教育実習」は、専門教育科目の中に位置付けられる必須科目であり、全科目を統合する具体的かつ総合的実践科目である。教育職員免許法施行規則第6条第1項で、「教育実習」は5単位の取得が規定されている。養成校で行う教育実習の「事前及び事後指導」として1単位、学外の実習として4単位、実習期間は4週間である。

実施の方法については、各養成校によって異なる。いつ頃、どのような実習を行うのかは、それぞれ養成校の特徴や実情に応じ、学生にとってより効果的な実習となるよう時期と内容が設定されている。

(2) 本学における実施基準

本学においては、先述の基準に基づき教育課程が編成されている。本学の特徴として、保育士資格取得のための履修科目や保育実習（保育所・施設）との兼ね合いがあり、その他に学業以外に学生参加の行事があるため、それらが効率的に実施されるよう編成されている。2年間に学ぶ教科と実習との関係は図1のように整理した。本学の教育実習は、2004年度から1年次に本学附属幼稚園3園において1週間、2年次には本学附属幼稚園3園と北陸圏内のキリスト教保育の協力園において3週間実施している。基本的には、この計4週間の実習を免許取得の基準としているが、より質の高い保育者養成を目指して、1年次後期に附属幼稚園において延べ5日程度の降園後実習と、附属幼稚園で行われる行事への自主的参加を課している。また2年次9月には、就職活動の一環として、任意に5日程度の特別教育実習を設定している。

＜図1＞ 2004年度 保育学科2年間の全体行事・実習・授業の一覧

* 2004年度講義要目に基づき筆者作成

1 年													2 年												
前 期						後 期						前 期						後 期							
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
・入学式 ・スプリングセミナー（北陸三県体育大会） （ゴルフセミナー） ・前期試験						・大学祭 ・修養会(2泊3日) ・クリスマス礼拝（オーストラリア研修） ・後期試験						・オリエンテーション （北陸三県体育大会） ・前期試験						・大学祭 ・修養会 ・クリスマス礼拝 ・後期試験							
5日						5日						10日						10日							
施設体験学習(1日以上)						1週間						3週間						特別							
保育所						幼稚園						特別						特別							
教育実習						教育実習						教育実習						教育実習							
専門教育科目						専門教育科目						専門教育科目						専門教育科目							
◎必修科目						◎必修科目						◎必修科目						◎必修科目							
○選択科目						○選択科目						○選択科目						○選択科目							
◎社会福祉Ⅰ ◎保育原理Ⅰ ◎発達心理学 ◎乳児保育Ⅰ ◎音楽概論 ◎障害児保育 ◎声楽Ⅰ ◎器楽Ⅰ ◎保育実習指導						◎養護原理Ⅰ ◎キリスト教保育 ◎小児栄養 ◎乳児保育Ⅱ ◎図画工作 ◎幼児体育 ◎子どもと環境 ◎子どもと表現Ⅰ ◎子どもと表現Ⅱ						◎社会福祉Ⅱ ◎養護内容 ◎精神保健 ◎児童福祉 ◎小児保健Ⅰ ◎器楽Ⅱ						◎家族援助論 ◎保育原理Ⅱ ◎児童文化 ◎小児保健Ⅱ ◎声楽Ⅱ							
教職専門科目						教職専門科目						教職専門科目						教職専門科目							
◎保育者論 ◎教育実習指導 ◎保育総合演習						◎保育方法論Ⅰ ◎子どもとことばⅠ ◎子どもと表現Ⅱ						◎子どもと表現Ⅲ ◎子どもと人間関係 ◎幼児教育史 ◎保育方法論Ⅱ						◎教育心理学 ◎保育課程総論 ◎子どもと健康 ◎子どもとことばⅡ ◎日本国憲法							
基礎科目						基礎科目						基礎科目						基礎科目							
◎キリスト教入門Ⅰ ◎自己の発見Ⅰ ◎教養演習Ⅰ ◎日本語表現法Ⅰ ◎情報機器演習Ⅰ ◎英語Ⅰ						◎キリスト教入門Ⅱ ◎自己の発見Ⅱ ◎教養演習Ⅱ ◎日本語表現法Ⅱ ◎生涯スポーツⅡ ◎情報機器演習Ⅱ ◎英語Ⅱ						◎人間の探求Ⅰ ◎自己の発見Ⅱ ◎教養演習Ⅱ ◎情報機器演習Ⅱ						◎人間の探求Ⅱ ◎健康論 ◎国際人をめざして							

3. 教育実習の方法と内容

(1) 実習の段階とその内容

教育実習は、観察実習、参加実習、責任実習の段階で、順次行われていく。

①観察実習（見学実習と参観実習）

観察実習は、実習の最初の段階として、幼稚園とはどのようなところであるかを概略的に学び、実習方法として見学や参観の形をとるものである。

見学の内容は、実習園の周辺環境、園舎・園庭・遊具の配置や機能、教職員の構成、クラス編成、園児数などの人的・物的環境を知り、園の教育目標や教育理念、一日の園生活の流れなどを把握する。これらは、事前訪問などのオリエンテーション時に知ることができる内容なので、実習が始まる前に整理し、理解しておく。

参観の内容は、教師と子どもの様子を観察しながら、保育を全体的に把握する。表面的ではあるが、子どもとはどのようなものか、教師はどのように接しているのか、保育の流れとはどのようなものかなど、少し距離をおいて保育を体験する。子どもに対しては、微笑んだり、多少の言葉をかけたりと自然な関わり方をしたり、担当教師に対しては、手伝いをして積極的姿勢を示しながら、保育を見守る。次の実習段階へスムーズに移れるように、この段階で実習するクラスの子どもの名前を覚え、できれば個々の特徴や行動の仕方に目を向け、子どもの興味・関心事は何かを探りながら、実習生として自分の位置を確保する。この段階の実習が、実習生の振舞いとして一番難しいが、責任実習をスムーズに展開していく前段階として、子どもを知る重要な段階と位置づけている。

②参加実習（助手実習）

実習するクラスの子どもや、保育の流れの全体的把握ができたところで、今度はより積極的に保育に参加していく段階である。

具体的には、直接子どもと関わって遊んだり、生活の中で必要な援助をしたり、時には手遊びや絵本の読み聞かせ、ピアノ伴奏などの保育活動を単発的に行ったりする。また、教師の助手としての働きも求められる。保育の流れを理解していれば、次にどのような手伝いをしたらよいのか予測はつくものである。

子どもと教師と一緒に、保育の流れに乗りながら、時に子どもの視線に立って子どもの世界に入って遊びを体験し、時に教師の視野で援助の仕方を学びながら適切な保育参加ができるように動くことが望まれる。

このように、この段階から積極的に子どもと関わって、距離を縮めながら子ども理解を深めていく。その一方で、教師としての適切な働きかけを試しながら、保育の営みを積極的に体感していく段階である。

③責任実習（部分実習と一日実習）

これまでの観察実習や参加実習を経て、実習の最終段階として責任実習がある。この段階は、実習生が担当教師に代わって、責任をもって指導計画を作成し、一人で保育活動を行うものである。保育活動は、一日のある特定の時間や特定の活動を行う部分実習であったり、午前か午後の半日実習であったり、登園から降園まで全てを担当する一日実習であったりする。

特に、一日実習の場合には、子ども個々の把握とクラス全体の把握、生活の流れ、環境の構成、主活動のとりくみ、教師としての援助をはじめ、出欠確認や家庭への配布物など保育全般の営みを統括していかなければならない。そのためには、綿密な指導計画を作成する必要がある。朝、子どもを受け入れてから保護者に返すまでの間、安全に子どもを預かる責任も担っていく。

責任実習では、これまでの実習の学びを総合的に駆使しながら、保育を実践していく。

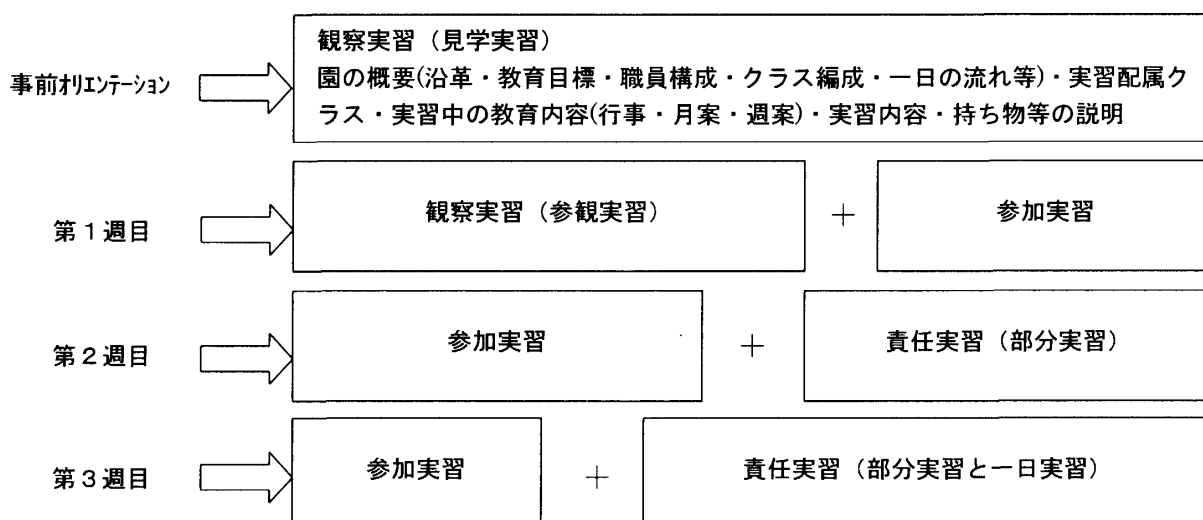
④その他の実習内容

このほかにも、実習の内容はさまざまにある。比較的、保育教材や保育技術、指導方法の習得に目が向けられやすいが、子どもが居ない時の仕事や目に見えない配慮を学ぶことも実習に含まれている。登園前の保育環境の整備、降園後の清掃や次の日の保育準備、日常的な整理整頓、衛生保全や安全保全への措置、保護者とのコミュニケーション、家庭や地域との連携の在り方などを学ぶことも大切な内容である。実習生自身の自己健康管理も問われることである。

(2) 1年次・附属幼稚園における実習内容と方法

1年次の実習では、観察実習と参加実習を行う。1週間という短い期間であるので、事前指導の授業の中で、附属幼稚園の概要についてのオリエンテーションを全体で行い、できるだけ初日から保育に参加していけるよう配慮している。方法は、1年生を3園に振り分け、一人1週間（実質5日間）、1クラスの中に入って実習する。1グループは8～10名になるため、複数の学生が1クラスに配属されることになる。本学の特徴として、1年次の実習指導は配属クラスの幼稚園教諭の他に、本学の実習担当教員が直接指導にあたっている。

(3) 2年次・協力園における実習内容と方法



＜図2＞ 3週間の実習内容のモデル案

小 山 祥 子

2年次の実習は参加実習と責任実習を行う。3週間、同じ園で1クラスの担任助手として実習することになる。学生は実習開始前に実習園を訪問し、事前オリエンテーションを受け、観察実習の内容を明らかにしておく。また3週間の実習プログラムは、各園に任せているが、養成校側として提示したモデル案は<図2>のようであり、徐々に責任実習ができるよう配慮をお願いしている。学生の配属は、養成校で振り分け、A日程とB日程に分けて送り出している。

4. 実習の評価

実習の評価は、実習生が行った保育活動や保育姿勢について客観的に振り返り、今後、保育者としての資質や保育技術を向上させていくための指標となるものである。評価には、(1) 実習先の指導者が行う評価、(2) 学生自身が行う自己評価、(3) 養成校側の実習担当教員が行う評価がある。

(1) 実習先が行う評価

実習園の指導者によって、養成校側が作成した「実習評価表」の中で総合的に評価される。本学の場合、2年次実習の評価内容は次のようであり、各項目ごとに5段階で評価される。

基 本 姿 勢	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に学ぶ姿勢が見られたか ・保育者や他の実習生と協力して保育にかかわれたか ・環境構成への配慮が見られたか ・目標をもって実習に取り組んでいたか
援助・指導	<ul style="list-style-type: none"> ・保育の流れを理解し援助したか ・教材研究を積極的行ったか ・子どもを理解し適切な援助・指導をしていたか
総 合 所 見	(自由記述)

学生は、これらの評価を受けた後で、様々な思いを抱くものだが、単に一喜一憂するのではなく、謙虚に受け止め、前向きな気持ちで今後の課題として捉えていくよう事後指導している。また、実習園や実習指導者によって評価の基準が違いため、学生に直接評価表を見せるのではなく、面談によって口頭で伝えている。

(2) 自己評価

自分自身で実習を振り返り、客観的に自己を知るのに最も適切な方法といわれる。実習先の評価表と同じ項目で自分の実習を客観的に判断してみる。そのことを通して、自分を保育者としてさらに向上させていけるよう事後指導の中で補完していく。

(3) 養成校が行う評価

実習先からの評価表と、学生が提出する実習日誌や指導案などの記録類などを見て、総合的に判断する評価である。本学の場合、担当教員は学生との面接で実習園側の評価を伝える一方、学生側からの話を受け止め、実習園と学生の双方の見方を客観的に評価している。実習園からの評価が悪く、本人の能力にも問題があると判断した場合、再実習する機会を与えている。資格取得に見合うまで、できる限りの能力が引き出せるよう、個々への指導を強化している。

5. 実習協力園との連携

(1) 実習事前懇談会

実習を行う約2ヶ月前（2004年度は2月）に市内で開催している。実習生受け入れにあたってのお願い事項、学生の実習内容、実習指導内容について説明し、質疑応答を設けて実習についての相互理解を図る場としている。

(2) 実習巡回指導

3週間の実習中、短大側教員によって最低2回の幼稚園巡回を実施している。巡回では学生が実習している様子を実際に見たり、現場の先生から直接話を聞いて、実習の現状を知る機会としている。ただし、保育中であるため保育の妨げとならないよう、学生と込み入った話をすることはできない。何か問題があれば、本人との話は保育後になる。

(3) 実習事後懇談会

全実習が終わった頃、巡回担当教員は実習園を訪問して園側の教職員と懇談の時間をもっている。その中で、学生に関する評価や、実習に関する質問や要望が出されることもある。懇談内容は、短大実習担当教員がまとめ、検討事項は次年度への申し送り事項として参考にしている。

Ⅱ. 2004年度・2年次教育実習の現状

1. 調査目的

2004年度から、3週間継続した教育実習が実施された。長い期間中の実習がどのようなものであったのか、実習内容や現場の指導内容、また実習日誌の記録や指導案作成などの取り組みを養成校側として把握する必要がある。本調査によって、実習の実際の様子を明らかにし、今後の教育実習や事前事後指導に活かせるよう課題を明確にすることを目的とする。

2. 調査対象と方法

本学保育学科2年生を対象に、3週間の実習を終えた後にアンケート調査を行った。回答は記名してもらい、選択式と自由記述式による質問票とした。

全回答者数は108名、対象実習園は19園である。

3. 調査内容

質問の内容は、次のようである。

- (1) 事前オリエンテーションと実際の実習内容について、①園の方針・教育方針を教えてくださいましたか、②年間計画や実習期間中の月案や週案を教えてくださいましたか、③事前の課題をもらった人は、数として何個くらいでしたか、④実習が始まってからの課題は何個くらいでしたか、⑤全部で何回くらい責任実習（部分・半日・一日実習）を行いましたか。
- (2) 実習日誌の記録については、①いつ提出しましたか、②いつ書きましたか、③指導者の欄の記入はありましたか、④記録で困ったことはありましたか、⑤指導者から指導されたことは

小 山 祥 子

何ですか。

- (3) 指導案の作成については、①いつ提出しましたか、②提出後の指導はありましたか、③指導案作成で困ったことはありましたか、④指導者から指導されたことは何ですか。
- (4) 実習の自己評価については、園側に依頼した評価と同じ項目について自分で5段階評価をつけた。
- (5) 実習を終えた後の全般的な感想は、①子どもとの関係は良好に築けましたか、②指導者との関係は良好に築けましたか、③他の実習生との関係は良好に築けましたか、④3週間の期間をどう感じましたか、⑤実習中、一番学びのあった出来事は何ですか、⑥巡回教員が訪問してきたとき何か相談したいことはありましたか、⑦実習後の感想を一言で表現すると何ですか。

4. 調査結果と考察

(1) 事前オリエンテーションと実際の実習内容について

結果は<表2>のようである。事前訪問のとき、①園の方針や教育目標を教えてもらった学生は全体の86%であり、②年間計画や月案、週案については25.9%であった。回答は園によって違ったり、同じ園でも学生によって回答が違っているが、園の方針・教育目標よりも年間計画・月案・週案を見せてもらった割合が低いということがわかった。園の方針・教育目標は保育の全体計画として園を特徴づける重要な部分であるが、年間計画・月案・週案は子どもを実際に保育していく上での具体的指導計画である。特に、今回のように3週間という長い教育実習では、責任実習にも比重がおかれるため、実習期間中の教師側の具体的指導計画を知ることは大切であると考え。

実習課題については、③事前に与えられた課題は、一人平均6.6ヶだったが、全く与えられなかった園がある一方で、一番多い園は平均17.8ヶと大きな開きがあることがわかった。同じ園でも、実習担当教師によっても課題の量が違っていた。④実習が始まってから追加された課題は、平均3.5ヶであった。事前に課題を出している園は途中の追加は少なく、事前に課題を出していないか、少ない園は、実習開始後に課題を出す傾向がみられた。結果的に実習期間中に与えられた課題は、一人平均10.1ヶになった。しかし、課題数が0という園から最高で21.3ヶと数値的にかなりの開きがあり、実習で体験する教師主導の保育活動に関しては経験の差が大きかったのではないかと思われた。

⑤責任実習の回数は、部分実習は一人平均8.9回、半日実習は平均1.3回、1日実習は0.8回であった。実習園との事前懇談会では、少なくとも1日実習は必ず1回は経験させてほしいと依頼していたので、ほとんどの園で1日実習は行われていたが、3園は行っていなかった。

教育実習と事前事後指導の現状と課題

＜表2＞ 事前オリエンテーションと実習の内容について *はい→教えてもらった *いいえ→教えてもらっていない

	実習 生数	①園方針・教育目標		②年間計画・月案・週案		③事前課 題平均数	④始後課 題平均数	全課題数 平 均 数	⑤責任実習（回数）		
		*はい	*いいえ	*はい	*いいえ				部分実習	半日実習	1日実習
A幼稚園	11	11	0	10	1	0	5.2	5.2	3.7	1.6	0.2
B幼稚園	8	4	4	0	7	1.3	8.8	10.1	8.9	2	0
C幼稚園	9	7	2	2	7	1.8	7	8.8	8.8	1	1
D幼稚園	6	4	2	0	6	7.2	0.9	8.1	6.5	2.5	1
E幼稚園	4	4	0	1	3	8.7	2.3	11	6.8	2	1
F幼稚園	6	6	0	1	5	8.2	0	8.2	5.7	0	1
G幼稚園	10	10	0	0	10	11.6	0	11.6	7.3	1.6	1
H幼稚園	5	5	0	1	4	17.8	3.5	21.3	14.4	2	1
I幼稚園	4	4	0	0	4	2.5	1.3	3.8	7	0.5	1
J幼稚園	9	9	0	1	8	0.2	5.6	5.8	4.4	1.9	0
K幼稚園	5	3	2	4	1	10	0.5	10.5	7.9	1.1	1
L幼稚園	6	2	4	0	6	4.2	4.5	8.7	7.4	1.2	0.8
M幼稚園	6	6	0	2	4	5.8	2.7	8.5	7	0.7	1
N幼稚園	7	7	0	3	4	6.4	12.2	18.6	10.2	2.2	1.2
O幼稚園	6	6	0	2	4	16.7	2.5	19.2	17.5	0	0
P幼稚園	1	0	1	0	1	7	0	7	8	0.5	1
Q幼稚園	2	2	0	0	2	11	0	11	8.5	2	1
R幼稚園	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0.5
S幼稚園	2	2	0	1	1	5	8.5	13.5	30	0.5	1
合計／平均 (割合%)	108名	93名 (86%)	15名 (13.9%)	28名 (25.9%)	79名 (73.2%)	6.6ヶ	3.5ヶ	10.1ヶ	8.9回	1.3回	0.8回

実習園から出された課題の中で、学生にとって困難だと感じられた具体的な課題内容は、＜表3＞のようであった。これらは、具体的にどう子どもに指導してよいかわからないという課題から、期間的に短くて仕上げるまでが困難だった課題や、直前の指導案の変更によって準備や取り組みの修正が困難だった課題、また前日に突然に出されたために時間的に準備が大変だった課題というように、それぞれに事情を含んでいた。

＜表3＞ 困難だった実習課題

活動分類	題 材 ・ テ ー マ
自然観察に関する活動	あり・くも・雨・おたまじゃくしとかえる・イチゴ・カブトムシ・さつまいも
社会に関する活動	順番の大切さを伝える・遠足前の話し合い・時の記念日について
健康に関する活動	手洗い・うがい・身体についての話
製作活動	時計・折り紙・壁面製作
ゲーム・リズム活動	教材を使ったミニゲーム・静的ゲーム*・動的ゲーム*・リトミック・異年齢集団のゲーム・2クラス合同のゲーム・楽器遊び
歌に関する活動	「おはなしゆびさん」「あめふりすいぞくかん」を教えること
その他	朝の集合・自由遊びの設定・カップシアター・天地創造に関する話・お別れ会の出し物

*印：学生の回答にあった言葉をそのまま使用したもので、それについては後述した

(2) 実習日誌の記録について

結果は<表4>に示したとおりである。①毎日提出していた学生は88.6%、時々提出できなかった学生は9.5%、催促された学生が2名いたが、ほとんどの学生は毎日提出できていた。②記録は、ほとんどが帰宅後の自宅で記録していた。事前指導では、記憶が新しいうちに日誌に記録するよう指導していたが、実際に園内で書くことは困難であり、帰宅後すぐに記録した学生52.9%、夕食後は40.3%で、ほぼその日のうちに記録できていた。③指導者欄の記載は、実習指導者によって対応が異なり、毎日書いてもらっている学生は53.7%と約半分で、書いてもらわない学生は33.9%いた。④口頭で指導を受けた学生が93%に及んでいることから、実際に日誌に記載されていなくとも口頭で指導を受けていると思われた。⑤日誌を記録する上で困った事柄を見ると、事前指導の中で強化すべき課題も見えてくるが、記録の仕方については実際に子どもを目の前にして初めて気づき、対処していくうちにわかってくる部分もあると考えられる。⑦実習指導者から受けた指導の中には、大学側の指導と異なるという内容もあったが、その点は今後、実習園との事前懇談会の中で明確に伝え、すり合わせておきたいと考える。

<表4> 実習日誌の記録について

①いつ提出しましたか？	・毎日提出した(88.6%) ・時々提出できなかった(9.5%) ・催促された(1.9%)
②いつ書きましたか？	・帰宅後すぐ(52.9%) ・夕食後(40.3%) ・深夜(20.7%) ・早朝(12.1%) ・園内(0) *複数回答有
③指導者欄の記載はありましたか？	・毎日書いてもらった(53.7%) ・時々書いてもらった(14.2%) ・書いてもらわなかった(33.9%) *複数回答有
④指導者欄以外の指導は？	・口頭で受けた(93%) ・口頭で受けない(7%)
⑤日誌の記録で困ったこと	・あった(58%) ・なかった(40%) ・無回答(2%)
⑥困ったこと	・子どもと接していると教師の援助が見られず記録できない・毎日同じ子どもに目がいってしまう・子どもの姿を書いて自分の思いを結びつけること・一日の流れを見ていない部分がある時・どの場面を書いたらよいか迷う・書くことがありすぎる・目当てを考えるのが大変・環境構成に何を書いてよいかわからない・書くのに時間がかかる・子どもの名前を思い出すのが大変・意味のある援助がかけない・どの子どものことだったか忘れる・反省会で述べるので日誌の反省欄に書くことがなくなる・元から書くことが苦手・行事があるときの日誌が書けない(子どもと関われないから)
⑦指導者から受けた指導	反省をもっと書くように・そこまでくわしくメモをとらなくてよい・自由遊びだけでなく他の場面を書くように・子どもの活動は自由遊びを書くように・自分で場面を取り上げて記録したが主活動を書くようにいわれた・目当てを具体的に書くように・言葉かけや子どもの会話を具体的に書くように・実名で書くように・視診は目診*という・学校で教わった書き方と違うと言われた・修正液は使わないように・誤字脱字の指摘・細かく記録されてよい・学んだことが活かされ次第によくなっていた

(3) 指導案の作成について

結果は<表5>に示したとおりである。①提出については、94.3%とほとんどの学生は事前の提出を実行していた。②提出後に指導を受けた学生も88.8%おり、実際に実行する前に適切な計画修正が行われたと推測できる。③指導案で困ったことについては、前半に実習したA日程組と後半に

教育実習と事前事後指導の現状と課題

実習したB日程組によって大きな違いをみた。つまり、A日程で実習した学生の60%は、困ったことがあったとし、34.5%の学生がなかったという回答であったが、一方、B日程で実習した学生は、35.3%の学生が困り、58.8%はなかったという反対の結果であった。それは、B日程の学生たちは、A日程の学生たちに比べると実質的に3週間の準備期間があり、指導案作成について十分な指導を受け、準備が行えた影響であったと考えられる。先に実習する学生と後に実習する学生に対し、3週間の時間的な差をどうするかが、事前指導の今後の課題であると考ええる。

＜表5＞ 指導案作成について

①いつ提出しましたか？	・前日まで(94.3%) ・当日の朝(9.6%) ・事後(2%) (複数回答有)
②提出後の指導を受けましたか？	・受けた(88.8%) ・受けない(11.2%)
③指導案作成で困ったこと	A日程→・あった(60%) ・なかった(34.5%) ・無回答(5.5%) B日程→・あった(35.3%) ・なかった(58.8%) ・無回答(5.9%)
④困ったこと	・予想される子どもの活動を書くこと(13人)・具体的な言葉かけ(適切な言葉かけ)を考えるのに苦労した(5人)・半日実習と一日実習はどこまで書けばよいのか(2人)・子どもの姿とねらいを書くのが大変だった・ねらいの的が絞りきれない・実習の活動内容と時間配分・活動の前後をどのように関連付けたいか・始まり方と終わりに困った・学校で教わったことと違う・実習生同士で指導案を相談する時間がとりにくかった・事前に提出し準備していたが、直前で訂正された・部分実習で好きなことを選んでといわれ困った
⑤指導者から言われたこと	・言葉かけは細かく具体的に書くように(9人)・言葉遣いは子どもにわかる言葉で・活動に必要なものを全て書くように・環境構成や机の配置(隊形など細かく描く)を書くように(4人)・子どもの行動と留意点を詳細に書く(4人)・うまくいかなかった場合の案をいくつか考えておく・空いてしまった時間は手遊びでうめる・台本のようなつもりで書く・子どもの姿は最後に書く・「子どもの姿」は困った姿ではなく「絵本を見るのが好き」という内容を書く・指導案の裏には書かない・反省会で聞いたことを自分で赤ペンいれろとよい。

(4) 実習の自己評価について

自己評価については、2つの事柄について学生自身で評価してもらった。まず、①実習目標に対する自己の達成度と、②実習園に依頼した評価表と同じ項目による自己評価である。

①の結果は、＜表6＞のようであった。達成度が一番高かったのは、「教師の仕事や役割を理解する」の平均4.2であり、達成、もしくはだいたい達成できたと自覚している。続いて、「子どもを理解する」が4.0で、だいたい達成できたとしている。一番達成度が低かった目標は、「キリスト教保育を理解する」の3.5で、半分強の達成であった。目標達成の判断理由を確かめる必要もあるが、本学が力を入れているキリスト教保育についての理解が高められるよう努力を促す必要があると思われた。

小 山 祥 子

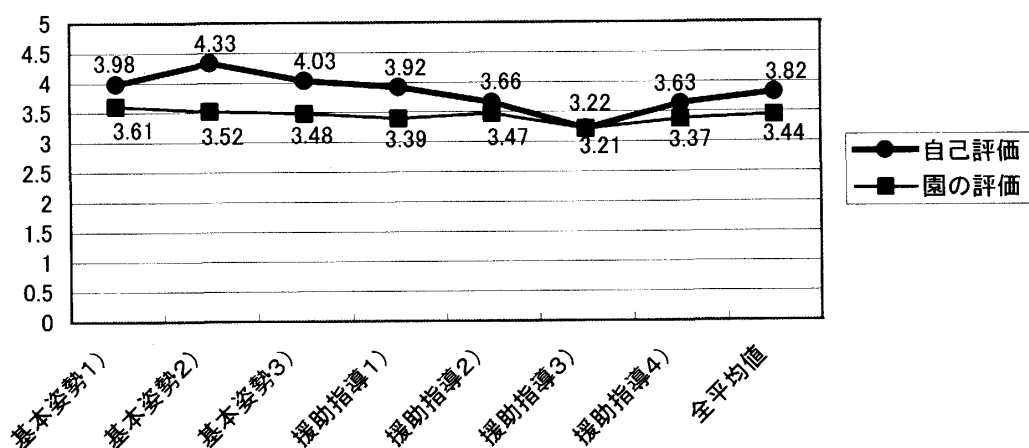
＜表6＞ 実習目標の達成度（5:達成できた 4:だいたい達成 3:半分位達成 2:少し達成 1:達成できず）

2年次の実習目標	達成度の平均値
・キリスト教保育を理解する	3.5
・教師の仕事や役割を理解する	4.2
・子どもを理解する	4.0
・幼稚園の環境と役割を理解する	3.8
・教師としての成長を目指す	3.9

次に、②実習園に依頼した評価表の項目に基づく学生の自己評価の平均値を＜表7＞に示した。実際に実習園からの評価の平均値と比較したグラフが＜図3＞である。

＜表7＞ 実習全体の5段階評価（5:大変優れている 4:優れている 3:普通 2:やや劣る 1:劣る）

評 価 項 目	学生の自己 評価平均値	実習園の 評価平均値	差
基本姿勢 1) 積極的に学んでいたか	3.98	3.61	0.37
	4.33	3.52	0.81
	4.03	3.48	0.55
援助・指導 1) 保育の流れを理解し援助したか	3.92	3.39	0.53
	3.66	3.47	0.19
	3.22	3.21	0.01
	3.63	3.37	0.26
援助・指導 4) 子どもを理解し適切な援助・指導ができたか	3.82	3.44	



＜図3＞自己評価と園の評価の比較

このように、学生の評価と実習園側の評価には差が見られた。全部の評価項目について、自己評価の方が上回っていた。これは、学生自身は自分としては一生懸命に取り組んだという思いの表れであろうが、実習園からは、現場で通用する能力、技術にはまだ満たない、もう少し学生の努力を促したいという表れではないかと考える。差が一番大きかった項目は、「保育者や他の実習生と協力して保育に関わられたか」で0.81ポイントの差であった。自分では協力したつもりでも、客観的には協力姿勢として受け止められていなかったということがいえる。保育の中で協力するとはどうい

うことか、また実習生同士の連携をどうすべきかを具体的に指導する必要がある。また、評価が一番低く、双方の差がほとんどなかった項目は「環境構成への配慮ができたか」である。学生と実習園の評価が近似値であるのは、双方の理解が近いという表れであり、評価が一番低いのは、達成困難な項目であるか、表現がわかりにくい項目であったと考えられる。日々保育の中では、担任教師が子どもと保育をつくっているため、実習生にとって、環境を配慮しながらの保育は難しい援助ではなかったかと思われる。これらの観点から、実習生にとって達成可能でわかりやすい評価項目を再考する必要があるとも考えられる。

(5) 実習を終えた後の全般的な感想について

実習を振り返っての全般的な感想は、＜表8＞のようであった。①子どもとの関係は、88%の学生が良好に築けたと感じ、②指導者との関係は、76%の学生が良好、③他の実習生との関係は、84%の学生が良好と答えていた。ほとんどの学生が、3週間の中で必要な関係を築き上げたと自覚している。④3週間という期間について、ちょうどよいと考えた学生は61%、もう少し長くてよいが28%、短い2%と、合計91%の学生が3週間を肯定的に捉えていた。⑤実習中で一番学びのあった出来事については、子どもとの出来事が53%と半数以上を占め、次に自分が責任実習したことが35%であり、大方の学生は、実習本来の体験が得られたものといえる。⑥巡回教員の訪問時に、相談したいことがあった学生は、実際に話ができた学生と合わせて22%、残り74%の学生は特に相談事はなかったという結果であった。このことは、実習中に相談事があったとしてもその都度、現場の指導教師へ質問し、適切な回答を得ていたのではないかと思われた。

＜表8＞ 実習後の全般的な感想について

①子どもとの関係は良好に築けましたか？	・はい (88%) ・だいたい (12%) ・いいえ (0%)
②指導者との関係は良好に築けましたか？	・はい (76%) ・だいたい (21%) ・いいえ (3%)
③他の実習生との関係は良好に築けましたか？	・はい (84%) ・だいたい (11%) ・いいえ (3%)
④3週間の実習期間をどう感じましたか？	・ちょうどよい (61%) ・もう少し長くて良い (28%) ・長い (9%) ・短い (2%)
⑤実習中で一番学びのあった出来事は？	・子どもとのこと (53%) ・指導者とのこと (8%) ・責任実習 (35%) ・実習生同士とのこと (1%) ・その他 (3%)
⑥巡回教員の訪問時、相談したいことがありましたか？	・実際に話をした (14%) ・あったができなかった (8%) ・特になかった (74%) ・その他 (3%)
⑦実習後の感想を一言で表現すると？ (選択・複数回答有)	・充実したよい実習だった (74%) ・辛かったがそれもよい経験だ (72%) ・毎日楽しかった (54%) ・次の保育所実習が楽しみだ (32%) ・まあまあそれなりの実習だった (10%) ・次の保育所実習が不安だ (3%) ・自信を失った (3%) ・二度とやりたくない (0.9%)

⑦実習後の感想をみると、「充実したよい実習だった」「辛かったがそれもよい経験だ」と肯定的に捉えている学生が多かった。また、子どもや実習指導担当者、実習生同士の関係がうまくいった学生は概ね前向きな感想が多く、反対に実習先での人間関係がうまく作れなかった学生は3週間の実習は長く、辛く、否定的な感想に終わっていた。しかし、どちらの感想にしても、実習前後の自分自身の変化については、自己の成長を肯定的に認める内容が多かった。

Ⅲ. 今後の課題

本稿では、本学で実施されている教育実習について、実習の考え方と実習の現状について検証してきた。実習の考え方については、キリスト教保育を基軸として、実習の意義、目的、内容については、今後も普遍的なものとする。方法については、今年度から新たなカリキュラムで行われたが、時期的、期間的なことから段階を経ており、学生にとって効果的な実習であったと評価できよう。

今後の課題としては、実習後の調査結果の考察から、次の3点を取り上げておきたい。1つ目は、実習園における実習体験の差をどうするかである。事前課題の量や責任実習の回数が実習園によって大きく異なっていたことは、養成校側と実習園との相互理解の促進によって改善される部分もあるが、一方で、量的な差は、学生自身の実習中の意欲・態度・能力も大きな要因であるとする。実習生が、現場の子どもや教師に少なからずともよい影響を与える存在であれば、責任実習は専門性を高める絶好の機会となるが、反対に現場に混乱をもたらす存在では実習の機会は極力避けたいものである。限られた授業の中で、個々の能力をどこまで引き上げて実習に送り出すかは、養成校に課せられた重大な課題である。その責任を十分に認識した上で、実習園への協力をも仰がねばならない。事前訪問時に、仮に実習期間中の指導計画を教えていただければ、学生にとって単元的に思われる課題が、実習で接する子どもたちを想定しながら、無理のない具体的な活動としてイメージできるであろう。また、あまり過度な量であると、課題をこなすことだけにエネルギーを費やし、本来、実習で学ぶべき「子ども理解」の芽を養う余裕がなくなってしまうのではないかと危惧される。実習では、まず目の前の子どもを知り、その子どもたちへどのような育ちを願い、どのような教材をきっかけとして保育を展開していくのかを学ぶ視点が大切と考える。教材は、子どもの育ちをいつとき刺激する単発活動である場合が多い。継続的に心身の発達を助長するつながりのある保育を展開する技術や、一人ひとりの子どもを捉えるしっかりとした眼と心を養うには、現場の実習において他にはない。調査結果の中にある目診・動的ゲーム・静的ゲームという言葉については、学生にとって保育を断片的に捉えかねない誤解を生む可能性があり、保育用語としての使い方を検証していきたいと考える。2つ目は、大学側と実習園側の連携をどう深めていくかである。事前懇談会、巡回、事後懇談会という機会をとらえて、前者の課題を含めて連携が必要であるとする。特に、指導案や実習日誌の書き方について指導が異なるという学生側の指摘にも応えていく必要があるからである。3つ目は、A日程とB日程の実習開始時期の差による学生の準備の差をどう縮めるかである。日程的にやむを得ない点でもあるが、差を縮める手立てを考えていきたい。

今回の調査は、学生側から明らかになった実習の現状と課題である。今後は実習協力園側への調査を依頼するなどして、より効果的な実習が行われるよう相互理解に努め、今後もよりよい実習と事前事後指導のあり方を模索していきたいと考える。

<参考文献・引用資料>

- ・拙稿、「保育・教育・施設実習」，西日本法規出版，2004．pp19-29.
- ・北陸学院短期大学保育学科作成，「教育実習の手引き」